

小説フレームアームズ・ガール

第4話「混乱の戦場の中で」

1. 国を守る為に

スティレットたちフレームアームズ・ガール部隊が、グランザム帝国に無事に帰還したのと同じ頃。かつてスティレットが暮らしていた、そしてルクセリオ公国騎士団によって滅ぼされたとされている、コーネリア共和国国境付近のゼピック村の跡地周辺・・・そこで秘密裏に開発していた新型兵器の情報が、ルクセリオ公国に露見してしまう。

その情報を察知したヴィクターは、新型兵器の鹵獲または破壊に向かったルクセリオ公国騎士団を迎撃する為に、現地への部隊の派遣を決断。その部隊の中にはフレームアームズ・ガール部隊も含まれていた。

当然、アーキテクトがスティレットの除隊届をヴィクターに提出したので、軍を辞める事になったスティレットがこの迎撃作戦に参加する事は無い・・・アーキテクトたちはそう思っていたのだが。

「ああああああああ・・・ああああああああああ・・・ああああああああああ！！」

城の地下に秘密裏に建造された、扉を固く閉ざされた地下施設・・・そこで拘束椅子に座らされて両手足を拘束され、頭にVR装置を取り付けられたスティレットが、とても苦しそうな叫び声を上げ続けていた。

地下施設には強力な防音設備が整えられており、スティレットの悲痛の叫び声は決して部屋の外に漏れる事は無い。

その外部から完全に孤立した地下施設内において、ヴィクターがもがき苦しむスティレットを、侮蔑の表情で見下していたのだった。

『ひやはははははは！！やっぱり人を殺すのって最高に楽しいぜ！！』

『ステラ、カレット、逃げ・・・ぐああああああああ！！』

とても楽しそうにマシンガンを乱射したシオンによって、スティレットの父親の全身に無数の穴が開き、そこから凄まじい勢いで血が流れていく。

驚愕の表情で、力無く床に崩れ落ちたスティレットの父親・・・その様子をただ怯えて見ている事しか出来ないスティレットの母親に、シオンは歓喜の表情で飛びかかる。

『ぐへへへへへ、お前よく見たらとてもいい女じゃねえか。』

『嫌、やめて、やめてえっ！！』

そして無理矢理ベッドに押し倒し、衣服を全て剥がし取って全裸にし、歓喜の表情でスティレットの母親を犯し始める。

『嫌ああああああああ！！もうやめてええええええええええ！！』

『うほっ、うほっ、うほっ、うほっ、うほっ。』

『・・・あああ・・・ああああ・・・ああああああああああっ！！』

絶望の表情で果ててしまったスティレットの母親を、シオンは情け容赦なくマシンガンで蜂の巣にしてしまう。

頭に取り付けられたVR装置によって、その残酷な映像を散々見せつけられたスティレットだったが…それをまた最初から何度も何度も、同じ映像を繰り返し見せ続けられてしまっていた。

何度も、何度も…何度も。

「ああああああ！！ああああああああ！！ああああああああああああああ！！」

「どうだリーズヴェルト少尉！！全ての元凶はシオン・アルザードだ！！奴がお前の両親を殺し、あまつさえお前の母親を散々凌辱するという大罪を犯したのだ！！」

「ああああああああああああ！！ああああああああああああああああああああ！！」

「お前の両親の仇はシオン・アルザードだ！！奴こそがお前が真に討つべき相手なのだ！！」

ヴィクターがもがき苦しむスティレットの耳元でそう叫び、スティレットはとても苦しそうに悲痛の叫び声を上げ続けている。

その様子を白衣を着た医者らしき男が、悲痛の表情で見つめていたのだった。

「皇帝陛下、もうお止め下さい！！リーズヴェルト少尉が一体何をしたというのですか！？そもそも洗脳行為は重大な国際条約違反です！！もしこんな事が世間に知れたら…！！」

「国際条約など気にしていただける状況か！？これも全ては憎きシオン・アルザードを打ち倒し、ルクセリオ公国との戦争に勝つ為なのだ！！」

「しかしリーズヴェルト少尉は除隊届を出しています！！戦う意思を無くした者を洗脳してまで、無理矢理戦わせるなど…！！」

「この娘は我が軍で唯一、シオン・アルザードと互角に渡り合えた存在だ！！あのオラトリオ大尉でさえも奴に無様な敗北を喫したのだぞ！？それなのに今のこの戦況において除隊など、許されるとでも思っているのか！？」

スティレットが拘束されている椅子の隣にあるテーブルには、スティレットに薬を注射したと思われる注射器が何本も置かれていた。

そして映像で両親がシオンに虐殺される動画を何度も繰り返し見せつけられているスティレットは、投与された薬との相乗効果もあってか、とても苦しそうな表情でもがき苦しんでいる。

シオンとの戦いを拒絶し、軍を辞めたスティレット…だがそんな彼女をアろう事かヴィクターは拘束し、洗脳措置を施し、戦う為の…正確にはシオンを殺す為のマシーンに仕立て上げようとしているのだ。

それはスティレットが帝国軍最強の剣士だから。唯一シオンと互角に渡り合う事が出来た存在だから。それ故にスティレットは除隊を許されず、こうして洗脳措置を施されているのだ。

「…ち…違う…はあ…はあ…シオンさんは…こんな事を…する…人…じゃ…」

「ええい、しぶとい奴め！！ならばもう少し出力を上げてやるわ！！」

「…！？がああああああ！！がああああああああああああああああ！！」

「よく見ろ！！胸に焼き付けろ！！お前の父親を殺し、お前の母親を犯したのはシオン・アルザードだ！！」

『嫌ああああああああ！！もうやめてええええええええええ！！』

『うほっ、うほっ、うほっ、うほっ、うほっ。』

『…あああ…ああああ…あああああああああつ！！』

「やめろおおおおおおおお！！これ以上ママを傷つけるなあああああああ！！」
「憎いか！？シオン・アルザードが憎いか！？そうだ憎め！！もっと憎め！！」
「シオン・アルザード！！殺す！！殺す！！殺すうううああああああああああ！！」
「そうだ憎め！！シオン・アルザードを憎むのだ！！そしてお前自身の手でシオン・アルザードを殺し、両親の仇を討つのだ！！」
「があああああああああああああああああああ！！殺してやる！！殺してやる！！絶対にお前だけは私の手で殺してやる！！があああああああああああああああああ！！」

やがて洗脳措置が完了し、VR装置を頭から外されたスティレットは・・・虚ろな瞳で口からヨダレを垂らしながら、殺す・・・殺す・・・とひたすら力無く呟き続けていた。

一体どれだけの時間を、スティレットはこんな生き地獄を強要され続けたのだろうか。

慕っていたシオンが、両親を殺す・・・そんな映像を何度も繰り返し見せられ続けていたのだ。スティレットにとってこれ程辛い事は無かったはずだ。

時間にして半日も経っていないはずなのだが、スティレットにはもっともっと長い時間を感じられたに違いない。

「・・・一応、洗脳措置は無事に完了しましたが・・・しかし皇帝陛下、こんな年端も行かぬ少女に、こんな残酷な事を・・・！！」

「戦う意思を無くしたフレームアームズ・ガールに存在価値など無い。それに新たなフレームアームズ・ガールたちの実戦投入の目途も立った所だ。シオン・アルザードさえ始末出来れば、この娘は最早用済みだ。」

「皇帝陛下、このような事が本当に許されるとでも・・・！！」

「私とて許されるなどとは思ってはおりん！！だがこれもルクセリオ公国との戦争に勝ち、この国を守る為なのだ！！この娘1人の犠牲でシオン・アルザードを討ち取れるのならば安い物だ！！」

全てはルクセリオ公国との戦争に勝ち、この国を守る為。その為ならばどのような汚名をも被る事も、ヴィクターは覚悟の上なのだ。

いや、それ程までにルクセリオ公国騎士団が・・・というよりもシオンが、ここまで歪んだ覚悟を持たせる程までにヴィクターを追い詰めてしまったと言うべきか。

半年前にルクセリオ公国騎士団が実戦投入したパワードスーツの圧倒的な性能の前に、これまでグランザム帝国軍は幾度にも渡って敗走を重ねてきた。

それに対抗する為に絶対的な切り札として投入したはずのフレームアームズ・ガール部隊をもつてしても、シオンを討ち倒すどころか逆に返り討ちに遭ってしまった。

轟雷や迅雷もシオンに太刀打ち出来ず、歴戦の戦士であるアーキテクトでさえもシオンに殺される寸前まで追い詰められ、唯一シオンと互角に渡り合えたのは、帝国軍最強の剣士とまで言われているスティレット1人だけという有様だ。

挙句の果てに、そのスティレットさえも軍を辞めるとかいう騒ぎになってしまった・・・ではスティレットに軍を辞められては、一体誰がシオンを討ち取れるというのか。

このような状況では、確かにヴィクターをこのような凶行に及ばせても、ある意味では仕方が無いと言えるのかもしれない。

スティレット1人を犠牲にする事で、シオンを討ち取れるなら安い物だと。

「リーズヴェルト少尉に洗脳措置は施した。そして洗脳維持装置もリーズヴェルト少尉のフレームアームに取り付けた。これでリーズヴェルト少尉は死ぬまでシオン・アルザードと戦い続ける事だろう。肉がもがれようと、骨が粉々に砕け散ろうともな。」

「皇帝陛下…貴方は何と言う事を…！！」

まどろみの意識の中で植え付けられたシオンへの憎しみと殺意を抱きながら、スティレットはひたすらに殺す…殺す…と呟き続けていた。

今のスティレットはシオンを殺す事しか頭に無い、ただの戦闘マシーンなのだ。

虚ろな瞳の奥底に映るのは…自分の両親を虐殺するシオンの姿。今のスティレットに見えているのはそれだけだ。

「…絶対に許さない…殺してやる…殺してやる…シオン・アルザード…殺す…殺す…シオン・アルザード…シオン…さん…」

必死に呟くスティレットの虚ろな瞳から、大粒の涙が溢れてきたのだった…。

「…助けて…。」

2. 始まりの場所

かつて、ゼピック村と呼ばれていた跡地…以前はここで村の人々が農業や林業を営み、美しい豊かな緑に溢れる自然に囲まれながら、質素ながらも静かに幸せに暮らしていたとされている。

それを5年前に突然ルクセリオ公国騎士団が襲撃を仕掛け、グランザム帝国軍が必死に抵抗したものの、生き残った村人はスティレット1人だけ…帝国の人々にとってはそれが一般常識となっており、子供たちが学校の授業でも教えられている事でもある。

それ故に帝国の人々の中には、ルクセリオ公国への強い怒りを露わにする者たちも多く、それがこの戦争を10年も長引かせている要因の1つにもなっているのだ。

今ではこの村…いや、村「だった」場所にあるのは、ボロボロに焼け焦げた無数の建物のみ。

敢えて跡地を片付けずにそのままにしておくのは、ルクセリオ公国騎士団がこの村を襲ったという事実を、帝国に住まう人々に決して忘れさせないようにというヴィクターの考えなのだというのが、グランザム帝国で公式発表されている事なのだが。

実際にはこんな場所だからこそ、秘密裏に新兵器の開発を進めるには絶好の場所なのだというのがヴィクターの本音なのだろう。

それがバレてしまったので、今回のルクセリオ公国騎士団の襲撃を受ける羽目になってしまったのだが。

「…こいつは酷いな…こんな所で本当に新兵器の開発が行われてるってのか…。」

目の前の惨状を見せつけられたリックは、予想もしなかったあまりに酷い光景に、思わず顔をしかめてしまったのだった。

こんな所で本当に5年前に、ルクセリオ公国騎士団による虐殺行為があったというのか。

ジークハルトはゼピック村に威力偵察を行った事は認めているものの、それはグランザム帝国が秘密裏に開発していた新兵器の情報を掴んだからで、また村人の虐殺を行った事実は一切無いと公式発表している。

だがヴィクターもまた、この件での村人の虐殺はルクセリオ公国騎士団による物だと反論し、互いに一步も譲ろうとしないのだ。

「シオン隊長は5年前、この村への威力偵察任務に参加していたんですよね？」

「…ああ…確かに記録には残ってるけど…僕にはその時の記憶が…っ…！！」
「…シオン隊長？どうなさいました？ご気分が優れないのですか？」
「さっきからちょっと…頭痛がね…くっ…！！」

とても辛そうに右手で頭を押さえるシオンに、心配そうな表情で寄り添うマチルダ。
この村に着いてからシオンは、ステイレットと戦っていた時にも何度も襲われていた激しい頭痛に、先程から再び襲われ続けるようになっていた。

確かにマチルダの言う通り、シオンは5年前にゼピック村への威力偵察任務に参加していたらしく、その事は公式記録にも残されている。

だがジークハルトが言うには、任務の最中にシオンが事故に遭ったらしく、その時のショックでシオンは当時の記憶が曖昧になってしまっているのだ。

「…ステラが言うには…彼女はここで…暮らしていたらしいんだけど…っ…！！」

まただ。またシオンの頭の中で、炎に包まれたこの村の光景が激しくフラッシュバックした。
その映像を頭をぶるんぶるんして何とか振り払い、襲い掛かる頭痛に必死に耐えながら、シオンは何とか周囲の状況を把握しようとする。

確かにリックの言うように、目の前の光景はあまりにも凄惨その物だ。だが今はそんな感傷に浸っている場合ではない。

ここでグランザム帝国軍が新兵器の開発を進めているという情報を得た以上、可能ならば鹵獲、最低でも破壊しなければならないのだ。

「ナナミ、周辺にグランザム帝国軍の反応は？」

『現在帝国軍の主力部隊がポイントGR53にて、防衛ラインを敷いている友軍と交戦中です。隊長たちの周囲には熱源反応無し。城下町の時のようにステルス機能を使っている可能性もありますが…。』

「実は主力部隊が囷で、オラトリオ大尉たちが本命という可能性もあるな…だがこの状況でステルス機能を使っても意味は…っ！？」

ふと、シオンの視界に映ったのは…他の周囲の建物と同様の、ボロボロになった2階建ての一軒家…だがそのこの標識に書かれていたのは…。

『父:ステイン・リーズヴェルト』

『母:カレット・リーズヴェルト』

『長女:ステイレット・リーズヴェルト』

「まさかここは…ステラの実家…なのか…っ…！？」

見覚えのある名前を見たシオンは、驚愕の表情になった。
その瞬間、再びシオンを襲う強烈な頭痛…そしてシオンの脳裏に映るフラッシュバック。
燃え盛る炎、ハンドガンを手にする自分、倒れているステイレットの両親、そして泣き叫ぶステイレット…。

『アルザード上等兵！！貴様、何をやっているかあつ！！』

『嫌ああああああああ！！パパああああああ！！ママあああああああつ！！』

『君の両親は死んだ。だけど君は…。』

そしてシオンの胸の奥底から湧き上がる、深い後悔の念。

「……っ！？シオン隊長！？」

「ううっ……ぐあああああああああああああああああつ！！」

「シオン隊長、しっかりなさって下さい！！シオン隊長！！」

突然頭を押さえてうずくまったシオンを、慌ててマチルダが介抱する。

シオンの命令で周辺の捜索をしていた他の隊員たちも、一体何事なのかと慌ててシオンに駆け寄ってきた。

シオンは頭を押さえながら、とても苦しそうな表情をしている。

「あがっ、あがあっ！！あああああああああああああつ！！」

「おいおい、一体どうしちゃったんですか！？シオン隊長！？」

「僕は……僕はあつ！！」

オスカル呼びかけにも応えられず、シオンは頭を押さえながら必死に大声で叫んでいた。

ボロボロになってしまったステイレットの実家……そしてステイレットと両親の名前が記載されていた標識。

それらを目にした途端、シオンの脳の奥底に押し込まれていた5年前の記憶が、まさに激流となってシオンの脳内を暴れ回っていた。

とても苦しそうな表情で、その凄まじい衝撃と頭痛に、必死に耐えていたシオンだったのだが。

頭の中で穏やかな光が放たれたと思った瞬間、シオンを襲っていた頭痛が、すーっ……と静まり返ったのだった。

「……はあっ……はあっ……はあっ……！！」

「……あの……シオン隊長……！？」

「……思い……出した……！！」

「……はい？」

心配そうな表情で自分を見つめるマチルダを尻目に、シオンは頭を押さえながら何とか立ち上がった。

5年前のあの日……ゼピック村への威力偵察任務において、自分とステイレットに一体何があったのか……シオンはステイレットの実家を目の当たりにした事がきっかけとなって、全てをはっきりと思い出したのだ。

「全てを……思い出したんだ……5年前にここで……僕とステラの身に何があったのかを……。」

「……シオン隊長……。」

「僕は5年前、確かにステラとここで出会っていた……僕とステラにとって、ここは始まりの地でもあったんだ……。」

とても悲しげな表情で、シオンは目の前のボロボロになった一軒家を見つめている。

今まで全然思い出せなかったのに、思い出そうとする度に激しい頭痛に襲われていたのに……今となってはまるで昨日の事の様に、はっきりと思い出す事が出来ていた。

5年前……一体ここで何があったのかを。5年前の事件の真実を。

「そうだ……あの時……5年前のあの威力偵察任務で……僕はステラを……！！」

見苦しい嘘をついたヴィクターを、アーキテクトは怒りの形相で一喝した。

なおも暴れようとするステイレットだったが、それでもアーキテクトはステイレットを抱き締めた状態のまま、ステイレットの耳元で必死に呼びかける。

「お前の両親をアルザード中尉が虐殺したと！？アルザード中尉がそんな酷い事をする男のはずがないだろうが！！」

「…ううう…うああ…殺す…殺す…パパとママの…仇…」

「お前はコーネリア共和国でアルザード中尉と心を通わせたのだろう！？違うのか！？リーズヴェルト少尉！！」

「あああ…あああああああああ…！！」

「…気をしっかり持て！！ステラあつ！！」

「ああああああああああああああああああああああつ！！」

アーキテクトを無理矢理振りほどいたステイレットは、そのままビームサーベルでシオンに斬りかかる。

それをビームサーベルで受け止めたシオンは、ステイレットと鏝迫り合いの状態になったのだが。

「…ステラ…？」

「…違う…シオンさんは…違う…！！」

目から大粒の涙を流しながら、ステイレットは悲しみの表情でシオンを見つめたのだった。

3. 蘇った記憶

「シオンさん…シオンさああああああん！！うわああああああああああああああん！！」

「ステラ！！」

ビームサーベルを懐にしまったステイレットは、号泣しながらシオンに抱き着いた。

先程までステイレットから感じられていたシオンへの殺気は、最早完全に消え失せている。

シオンもまたビームサーベルを懐にしまい、号泣するステイレットをとっさに抱き締めた。

シオンの身体を必死に抱き締めながら、身体を震わせるステイレット。

『な…これは一体どういう事なのだ…！！リーズヴェルト少尉！！何をやっている！？その男はお前の両親を殺した犯人なのだぞ！？』

「…違う…！！」

『その男のせいで、お前は人生を滅茶苦茶にされたのだぞ！？』

「違う違う違う違う違う！！」

ヴィクターの言葉を必死に否定するステイレットに、アーキテクトたちが慌てて駆け寄ってきた。

とても心配そうな表情で、アーキテクトたちはステイレットを見つめる。

その様子をマチルダたちが、一体全体何がどうなっているのかと、啞然とした表情で見つめていたのだが。

「…私…思い出しました…5年前に私のパパとママを殺したのはシオンさんじゃない…。」

『な…！？』

「皇帝陛下！！貴方の命令で帝国軍がパパとママを殺した！！そうでしょう！？」

驚愕の事実を、失われた記憶の全てを、スティレットはヴィクターにぶちまけたのだった。
目から大粒の涙を流しながら、ヴィクターへの怒りと憎しみの感情をぶつけながら。

『…リーズヴェルト少尉…貴様…！！』

「5年前の事件の真相を、私は全て思い出しました！！帝国軍が秘密裏に開発していた新兵器が誤作動して村を焼いた事も！！その事実を隠蔽する為に、貴方が帝国軍に村人の皆殺しを命令した事も！！そしてシオンさんが命懸けで、命令違反を犯してまで私を助けてくれた事も！！」

『し…信じられん…貴様の記憶は完璧に消し去ったはずだ！！』

「そう…私はその後貴方に捕らえられて、証拠隠滅の為にあの日の記憶を消去された！！そして私はゼピック村の唯一の生き残りとして貴方に祀り上げられた！！ルクセリオ公国への怒りと憎しみの象徴として！！」

『ぬ…ぬぐう…！！』

あまりに衝撃的な内容に、アーキテクトたちもマチルダたちも驚きを隠せないでいた。

シオンもまた、自分が思い出した5年前の記憶とスティレットの証言が一致していた事に、何ともやり切れない表情になっている。

「…そうだ…5年前…僕は君を守る事が出来なかった…君を守るって、そう誓ったはずなのに…僕はハーケン大尉の妨害を受けて…！！」

「シオンさん…もしかしてシオンさんも記憶が…！！？」

「教えてくれステラ。君は一体皇帝ヴィクターに何をされたんだ！？君は除隊したんじゃないのか！？何故僕に対してあそこまでの殺意を向けたりなんかしたんだ！？」

シオンの身体をしっかりと抱き締めながら、スティレットは涙目になりながらも、まるで助けを求めかのようにシオンにはっきりと告げた。

自分がヴィクターに何をされたのか…その真実を。

「…オラトリオ大尉が除隊届を出してくれたんですけど…書類に不備があったとかで私は陛下に呼ばれたんです…そしたら変な薬を注射されて、頭の中がごちゃごちゃになって…頭に変な機械を付けられて、シオンさんが私のパパとママを虐殺する映像を何度も見せられて…！！」

「「…洗脳か…！！」」

シオンとアーキテクトは苦々しい表情で、同時にそう呟いたのだった。

恐らくは薬で脳の働きを一時的に低下させ、スティレットの思考力と判断力を鈍らせた上で、シオンが両親を虐殺する映像を何度も見せ続ける事で、スティレットにシオンへの怒りと憎しみの心を無理矢理植え付けたのだろう。

それによって、スティレットがどれだけ苦しむ事になるのか…スティレットの心と身体にどれだけの負担がかかるのか…それを全く考慮せずに。

「馬鹿な、重大な国際条約違反だぞ！？洗脳行為も、除隊を希望する軍人に戦闘行為を強要する事も！！」

「アルザード中尉。これは国際条約違反だとか、最早そういう次元での話ではないぞ…！！皇帝ヴィクター！！よくもステラに生き地獄を味合わせしてくれたなあっ！！」

「僕たちシオン隊は現時刻をもって、フレームアームズ・ガール部隊と休戦する！！そして貴方が犯した数々の暴挙を世界中に暴露する！！そうなれば貴方は世界中から非難されて国際裁判

にかけられ、皇帝の座を追われる事は避けられないだろう！！」

シオンとアーキテクトに怒りの形相で怒鳴り散らされたヴィクターは、完全に追い詰められてしまっていた。

恐らくは消し去ったはずのスティレットの記憶が蘇ってしまったのは、自分が施した洗脳がきっかけとなったからなのだろう。それ以外に原因は考えられない。

このままシオンたちを生かしておけば、それこそシオンの言うように、様々な国際条約違反を犯しスティレットを不当に苦しめた罪で国際裁判にかけられ、皇帝の座を追われる事になりかねない。

「…ううっ…！！」

「ステラ、どうした！？」

「シオンさん、頭の中がごわごわする～！！助けてえっ！！」

とても苦しそうに、シオンの身体を必死に抱き締めるスティレット。

スティレットのフレームアームに取り付けられた洗脳維持装置が効いているのだ。スティレットは正気に戻ったものの、それでも洗脳自体は未だ完全には解けていないという事だ。

「ねえ、アルザード中尉！！何とかならないの！？」

「…骨折や外傷の措置なら、僕にも経験はあるけど…洗脳となると、僕にも一体全体どうしたらいいのか…！！」

「そんな…！！」

シオンの言葉に、迅雷はとても不安そうな表情を見せたのだが。

だがこんな状況だからこそ、シオンは中尉として、シオン隊の隊長として、毅然とした態度を皆に示さねばならない。

スティレットをしっかりと抱き締めながら、シオンはアーキテクトたちにはっきりと告げた。

「この近くのカストロ市街に大学病院がある。そこに連れて行けばステラを診て貰えるかもしれない。ルクセリオ公国の領地だから、ステラの治療に難色を示されるかもしれないけど…僕が事情を説明する。」

「いいのか？お前たちの任務は、ここで開発中の新兵器の鹵獲か破壊なのだろう？最もその新兵器とやらが一体どんな代物なのかは、私にも知らされていないのだがな。」

「今はステラを救う事が最優先だ。それに新兵器の鹵獲任務に関しては、アルフレッド大尉に何とか引き継いで貰えないか頼んでみるよ。」

スティレットの頭を撫でながら、シオンは啞然とした表情のままのマチルダたちに向き直った。

軍人として、シオン隊の隊長として、マチルダたちに無茶な事を言う事になるのは分かっているが…それでも今はスティレットを一刻も早く救わなければならないのだ。

例えそれによって、軍法会議にかけられる事になったとしても。

「皆、聞いての通りだ。突然の事で申し訳ないが、僕は今からオラトリオ大尉たちと一緒に、カストロ市街の大学病院にステラを連れていく。」

「シオン隊長、正気ですか！？そいつは敵国の兵士なんですよ！？」

「リックの言う事も最もだ。だけどステラは除隊申請をして、今は民間人なんだ。それにステラが洗脳されて無理矢理戦わされていた事は、君たちも聞いていただろう。」

「それは…確かにその通りですが…。」

「勝手な事を言っているのは分かっているよ。だけど今は一刻を争う状況だ。下手をしたらステラ

4. 暴走するステラ

「やっぱりパパだ…良かった、生きてたんだね…！！」

「ステラ、一体何を…！？」

「ああ…それにママ…まさか生きてるなんて思わなかったよ…！！」

今度はアーキテクトに抱き着いたスティレットは、とても嬉しそうにアーキテクトの頬に自分の頬をスリスリしたのだった。

「ステラ、お前は何を言っている！？」

「あはあ、アスナちゃんとアスカちゃんも…生きていてくれたんだあ！！」

今度は轟雷と迅雷を首を両腕で抱き締め、とても嬉しそうな表情を見せる。

「えへへへ、アスナちゃ〜ん。」

「ちょ、ステラ！？私はアスナじゃなくて轟雷なんだけど！？」

「ええ？何とぼけた事言ってるの？ねえ、だってどこからどう見てもアスナちゃんじゃない。私がアスナちゃんとアスカちゃんを見間違えらるとでも思ってるの？」

「ス…ステラ…！？」

「確かに2人はそっくりさんの双子だけどもさあ、ほら、ここにあるでしょ？アスナちゃんのホクロ。この位置がアスカちゃんと微妙に違うんだよなあ。」

スティレットが轟雷の首元を指先でプニプニするが…そんな所にホクロなど付いていなかった。

「良かった…とにかくパパもママも、アスナちゃんもアスカちゃんも…生きていてくれたんだあ…もう、シオンさんったら嘘つきなんだから。私のパパもママも死んだとか、私に幸せになれとか生きろとか言ってたけど、ちゃんと皆の事を助けてくれたんじゃない。」

一体全体スティレットが何を言っているのか、シオンもアーキテクトも轟雷も迅雷も、全く訳が分からなかった。

4人共戸惑いを隠せずに、おかしくなってしまった目の前のスティレットを見つめている。

「…あれ、でも他の村の皆は…そうか、シオンさんでも助けられなかったんだ…。」

「ステラ、君は一体何を言っているんだ！？僕は君の両親を…！！」

「お願いパパ、シオンさんを責めないであげて！！シオンさんはね、命令違反を犯してまで私を助けてくれたんだよ！？」

「…ステラ…！？」

「そうだよ…全部あいつらが悪いんだ…！！皆を殺そうとした帝国の奴らと…私を助けてくれたシオンさんを傷つけた、ルクセリオ公国騎士団の連中が！！特にあのハーケン大尉とかいうデブ！！もう、絶対に許せないんだから！！」

ビームサーベルを取り出したスティレットが、マチルダたちの姿を見据えた次の瞬間。

突然スティレットの全身から放たれた、凄まじいまでの殺気。

それを敏感に察知したシオンが、反射的に必死の形相で叫んだのだが…。

「な…！？やめろステラ！！」

「だから私が殺してあげるの！！ルクセリオ公国騎士団の連中も！！グランザム帝国軍の連中も！！全部！！全て！！皆！！」

スティレットの殺気が自分に向けられている事を瞬時に悟ったマチルダは、反射的にビームサーベルを抜いて身構えた。

だが次の瞬間…いつの間にかマチルダの腹を、スティレットのビームサーベルが貫いていた。

「…え…？」

一体何が起こったのか…というか一体いつの間に斬られていたのか…マチルダは全く状況を飲み込めないまま…口から血を吐いてその場に崩れ落ちてしまった。

「…あ…が…！？」

「マチルダあああああああああああああああああつ！！」

絶叫するシオン。倒れたマチルダの腹部から、物凄い勢いで血が溢れ出ている。

銃弾さえも弾き返す程のパワードスーツの装甲を嘲笑うかのように、マチルダのパワードスーツの腹部には、とても綺麗な切り口で穴が開いていた。

それはビームサーベルの威力だけでなく、スティレットの剣術自体も達人クラスの域に達しているからこそ…繊細さと威力と美しさを兼ね備えた凄まじいまでの斬撃を、まさに神速の如き速さで繰り出したからこそ可能な事なのだ。

「死ねえええええええええええええええええええええつ！！」

「ステラ、あんた一体何やってんのよ！？」

今度はリックに放たれた斬撃を、迅雷が辛うじてバスタードソードで受け止めた。

鏝迫り合いの状態になる2人。そこへ轟雷が慌てて背後からスティレットを抑え込む。

必死の形相でリックに対して死ね死ねと叫ぶスティレットの目からは、大粒の涙が。

その間にシオンとアーキテクトが、慌ててマチルダの応急処置を始めた。

マチルダのパワードスーツを脱がし、傷口を消毒し、迅速に止血処置をする。

スティレットが綺麗に斬ってくれたお陰か、幸いにも血はすぐに止まったのだが、それでも依然として本格的な医療施設で早急に治療を受けさせないと危険な状態だ。

「…辛うじて急所は外れている…いや、ステラが外してくれたと言った方が正しいか…！！」

「お前たち！！直ちにアレン上等兵を連れてビスマルクに帰投しろ！！」

必死の形相で自分たちに叫ぶアーキテクトに、オスカルが露骨に不満そうな態度を見せる。

無理も無いだろう。シオンの指示で休戦状態にあるとはいえ、本来ならば彼女たちはオスカルたちの敵なのだから。

しかもアーキテクトたちとは、つい先日まで何度か命のやり取りをしてきた相手なのだ。そんな相手から命令などされても、確かに不満が募るのも仕方が無いのかもしれないが…。

「ふ、ふざけんなよてめえ！！何で俺らがてめえの命令なんか聞かなきゃならねえんだ！？」

「そんな悠長な事を言っている場合か！？応急処置は済ませたが、早くアレン上等兵に治療を受けさせないと手遅れになるぞ！？」

「だ、だからって、何でてめえなんかに命令されなきゃ・・・！！」
「貴様らはアレン上等兵を死なせたいのか愚か者共があつ！！」

アーキテクトに怒鳴られながらも、マチルダの命が危ない事を理解しながらも、それでもオスカルは彼女の指示に従う事にどうしても躊躇してしまう。
そんなオスカルの心情を察したシオンが、慌ててアーキテクトを庇うように前に進み出た。

「総員マチルダを連れて早急にビスマルクに戻れ！！これは命令だ！！」
「・・・シ、シオン隊長・・・！！」

自分たちに怒鳴り散らしたシオンの必死の表情を見て、さすがのオスカルも今の状況を理解したのだった。

オスカルはシオンとは、もう半年近い付き合いになるが・・・これまでシオンが『命令』などという言い方をした事は一度も無かった。それはシオンがシオン隊のメンバーを、部下としてではなく『仲間』や『戦友』として扱っていたからに他ならない。

そのシオンが、オスカルたちに対して『命令』などという言い方をしたのだ。

それはマチルダの命が危ないという事もあるが・・・何よりもシオンたちが暴走した今のステイレットを止めるには、オスカルたちがいても足手まといになるだけ・・・無駄に戦死者が増えるだけだ、邪魔だとシオンが判断したからなのだろう。

「分かったよ！！分かりましたよ！！その代わり絶対に死なないで下さいよ、シオン隊長！！」

マチルダをお姫様抱っこしたオスカルが、他のシオン隊のメンバーたちと共に慌ててビスマルクへと撤退していく。

それを見届けたシオンが決意の表情で、轟雷に羽交い絞めされているステイレットを見据えた。

「ナナミ、聞いての通りだ！！すぐにマチルダを治療出来るように医療スタッフを待機させておいてくれ！！」

『りよ、了解しました！！』

「それと僕は今からステラを助ける事に集中したい！！済まないが通信を切らせて貰う！！」

『・・・シオン隊長・・・！？』

「君たちはマチルダを治療後、アルフレッド大尉の指揮下に入れ！！いいな！？」

『・・・っ！！シオン隊長おっ！！』

通信を切ろうとしたシオンに、ナナミが今にも泣きそうな表情で必死に呼びかけた。

そのナナミの必死さを敏感に感じたからなのか、通信を切ろうとしたシオンの右手が慌てて途中で止まる。

『・・・シオン隊長、ちゃんと私たちの下に帰ってきてくれますよね！？』

「ナナミ・・・！？」

『約束して下さい！！必ず生きて戻るって！！僕なら大丈夫だから心配するなって！！』

「・・・それは・・・。」

ナナミは不安なのだ。このままシオンがどこか遠くへと行ってしまわないかと・・・暴走するステイレットの手によって、シオンが殺されてしまうのではないかと。

僕なら大丈夫だから・・・そうナナミに言いかけたシオンだったが・・・暴走するステイレットが轟雷を弾き飛ばす光景を目の当たりにさせられた事で、さすがのシオンも本気で命の危険を感じ

逃げ惑う帝国兵たちを、怒りと憎しみに満ちた形相で、情け容赦なく斬り殺していくステイレット。慌てて帝国兵たちがステイレットを銃で撃とうとするが、ステイレットのあまりの動きの速さの前にロックオンすらままならない。

あっという間に、ステイレットの周囲に死体の山が出来上がっていった。

「…ば…馬鹿な…あれだけの数の部隊が、リーズヴェルト少尉1人だけで…こんな…こんな事が…っ…!？」

驚愕の表情のヴィクターが、暴走するステイレットの狂乱ぶりに愕然とさせられたのだった…。

5. 混乱の戦場の中で

これはヴィクターにとっては、まさに皮肉だとしか言いようがない状況だ。

アーキテクトを通して除隊届を出したステイレットを戦わせる為に無理矢理洗脳したものの、シオンの呼びかけによって正気を取り戻したばかりか、反発したアーキテクトたちの謀反を招く事態になってしまった。

ならばと洗脳維持装置の出力を最大まで上げたものの、今度はステイレットの暴走を招いてしまい、さらに国際条約違反の証拠隠滅の為にステイレットたちを抹殺しようとしたものの、差し向けた部隊が暴走したステイレット1人によって、あっという間に壊滅してしまった。

ルクセリオ公国との戦争に勝つ為に送り出した、絶対的な切り札であるはずのステイレット…その彼女の手によって壊滅させられるグランザム帝国軍…一連の事態は全て、自分がステイレットに施した洗脳が招いてしまった事なのだ。ヴィクターにとってこれ程皮肉な話は無いだろう。

いや、もっと遡れば、ヴィクターが5年前にゼピック村の人々の皆殺しを命じたりしなければ、こんな事にはならなかったに違いない。

ヴィクターは止むを得ず、ステイレットの洗脳維持装置を解除する事にした。

ステイレットの洗脳が再び解けてしまうリスクはあるものの、それでも今はステイレットの暴走を止める事の方が先決だ。

証拠隠滅や口封じなら、後で幾らでもどうにでもなる…そうヴィクターは判断したのだが。

「…ど、どういう事だ…!？」

ヴィクターが洗脳維持装置を操作しようとするものの、タッチパネルを幾ら触っても、画面に表示されるのは制御不能に陥った事を示す警告メッセージのみだ。

ステイレットは未だ暴走を続けたまま、逃げ惑う帝国兵たちをなぶり殺しにしている。

「何故だ何故だ何故だ!？何故こんな事になってしまったのだあつ!!」

そんなヴィクターの焦りと苛立ちなど知る由もなく、ステイレットは逃げ惑う帝国兵たちをビームサーベルで斬り殺し続けていた。

既にステイレットによって部隊の指揮官も殺害されてしまっており、指揮系統は完全に混乱してしまっている状況だ。

完全に腰を抜かしてしまい、怯えながらお漏らししてしまった帝国兵の新兵を、ステイレットが怒り

自分が助け起こした轟雷と迅雷の手をぎゅっと握りながら、シオンは何の迷いも無い力強い瞳ではっきりと告げた。

まだシオンは希望を捨てていない。スティレットを救う事をシオンは諦めていないのだ。

そんなシオンの姿をヴィクターの傍らで見せつけられた医師が覚悟を決め、決意の表情でタッチパネルを操作し出した。

次の瞬間、シオンの端末に送られてきたデータ…それは…。

『アルザード中尉！！聞こえるか！？私はリーズヴェルト少尉に洗脳措置と…そして5年前にリーズヴェルト少尉の記憶消去を施した者だ！！』

「な…！？」

『君の端末に、リーズヴェルト少尉の洗脳に関するデータを送った！！』

予想外の人物からの通信に、シオンたちは驚きの表情になる。

ヴィクターもまた、突然の医師の行動に驚きを隠せないでいた。

『彼女のフレームアームの胸の部分に、青色のクリスタルが埋め込まれているのが分かるか！？それが洗脳維持装置だ！！それを破壊すれば彼女は正気に戻るはずだ！！』

「…あれか！！」

アーキテクトと剣を交えるスティレットの胸元には、確かに青色のクリスタルが埋め込まれていた。

スティレットのフレームアームと同じような色で目立たなかったのも、シオンたちも言われるまで全然気が付かなかったのだが。

『貴様あつ、一体何の真似だあつ！？』

『皇帝陛下のご命令とはいえ、私は彼女に許されない事をしてしまった！！この償いはいずれ必ずさせて貰うつもりだ！！だからアルザード中尉、彼女を救ってやってくれ！！そしてどうか彼女と共に、光溢れる未来を…っ！！』

その瞬間、シオンの通信機に響き渡る銃声。

そして怒り狂ったヴィクターの罵声と、うめき声を上げる医師の苦しそうな声…さらにオペレーターたちの悲痛な叫び声が聞こえてきた。

『この…裏切り者があああああああああああああああつ！！』

「皇帝ヴィクター、貴方は何て事を…！！」

『シオン・アルザード！！何もかも全部貴様が悪いのだ！！貴様が5年前にリーズヴェルト少尉を救わなければ、こんな面倒な事には…っ！？』

その瞬間、またしてもシオンの通信機に銃声が響き渡った。

そして聞こえてきたのは、うめき声を上げるヴィクターの苦しそうな声と…さらに悲痛な叫び声を上げるオペレーターたちの声。

『…アル…ザード中尉…どうか…どう…か…っ！！』

『き…貴様…あ…が…！！』

『……。』

『こ…こんな事で…こんな所で私が…っ…！！』

どうっ…と、何かが派手に倒れる音がした。
一連の音声だけの通信ではあったが、それでもシオンは全てを理解した。
ヴィクターと医師が互いに銃を打ち合って死んだ事…それによって周囲のオペレーターたちが…いや、グランザム帝国軍全てが大混乱状態に陥ったという事を。
そして…ヴィクターが死んだ事で、この10年も続いた戦争が終わりを迎えるであろう事も。

「ママどいて！！あいつら殺せない！！」
「ぐはあっ！！」

スティレットに弾き飛ばされたアーキテクトが、派手に壁に叩き付けられた。
皇帝ヴィクターは死んだ。だがそれでもまだ終わっていない。
スティレットを救わなければ、シオンたちはまだ終われないのだ。
よろめきながらもアーキテクトは立ち上がり、何の迷いも無い瞳でスティレットを見据える。

「オラトリオ大尉！！聞こえたか！？」
「ああ、ステラの胸元のクリスタルを破壊すればいいのだな！？私たち3人でステラの動きを止める！！お前がステラを救ってやるのだ！！アルザード中尉！！」
「僕の事はシオンでいいよ！！」
「そうか、ならばお前も私の事をアキトと呼べ！！いいな！？シオン！！」

アーキテクトがビームサーベルを手に、スティレットに再び斬りかかった。
それをスティレットはビームサーベルで受け止め、2人は鏝迫り合いの状態になる。

「轟雷！！迅雷！！聞いての通りだ！！私たち4人でステラを助けるぞ！！」
「イエス！！ママ！！」
「んもう、ママもアスナちゃんもアスカちゃんも、さっきから何で私の邪魔ばかりするの！？」

スティレットはアーキテクトを弾き飛ばし、さらに側面から向かってきた轟雷の顔面を殴り飛ばし、迅雷の腹を蹴飛ばした。
その隙にシオンはスティレットに飛びかかり、ぎゅっと力強く抱き締める。

「ステラ、もう止めるんだ！！皇帝ヴィクターは死んだ！！もう戦争は終わったんだ！！」
「終わってなんかいないよパパ！！帝国を完全に滅ぼすまで、私の復讐は追わないの！！」
「怒りと憎しみの心に囚われてしまっては駄目だ！！君はかつての僕の様になってしまっては駄目なんだ！！君のような優しくて可憐な少女が、復讐に身を焦がして…うおわあっ！？」

大外刈りでシオンを地面に叩き付けたスティレットを、今度はアーキテクトが背後からぎゅっと力強く抱き締めた。

「私はそんな事の為に前を鍛えた訳ではないぞ！！お前のその剣は、お前の大切な物を守る為にあるのではなかったのか！？ステラ！！」
「だってだってだって、あいつらが皆を殺すから！！だから私が仇を取ってあげるの！！」
「私もシオンと同じだ！！私も5年前に恋人を戦争で失った！！だからこそ私には分かるのだ！！お前が今抱えている苦しみと憎しみと、心の痛みが…のわあっ！？」

背負い投げでアーキテクトを地面に叩き付けたスティレットを、今度は轟雷と迅雷が側面からぎゅっと力強く抱き締めた。

「ステラ、あんた私とお姉ちゃんに言ったよね！？チャイナ王国に復讐なんて考えたら駄目だって！！そんな事をしても私たちは何も救われはしないって！！」

「それで私たちとステラで殴り合いの大喧嘩になったじゃん！！それでもステラは死んでしまった両親の分まで幸せになれて、私たちに何度殴られても真剣な表情で言ってくれた！！復讐に燃える私と迅雷に、あんたと隊長だけは心の底から真剣に向き合ってくれたんだ！！」

「だから私もお姉ちゃんも、ステラと隊長について行こうって決めたんだよ！？そのあんたが人を大勢殺して、復讐に身を焦がしてどうするのさ！？このオタンコナスのアンポンタン！！」

シオンも、アーキテクトも、轟雷も、迅雷も、この戦乱の世の中で、大切な者を理不尽に失った。

シオンは妻と娘を。アーキテクトは恋人を。轟雷と迅雷は両親を。

だからこそ4人共、暴走するスティレットの心の痛みが、グランザム帝国への怒りと憎しみが、その身をもって理解出来るのだ。

決して気休めの、その場凌ぎの言葉などではない。だからこそ4人の言葉はスティレットの心に福音のように響き、心の奥底にまで届くのだ。

この4人だからこそ、スティレットを怒りと憎しみの呪縛から救う事が出来るのだ。

いや・・・この4人でなければ、スティレットを救う事など出来はしないのだ。

「・・・ううう・・・うああ・・・シオンさん・・・大尉・・・轟雷ちゃん・・・迅雷ちゃん・・・私はあつ！！」

目から大粒の涙を流しながら、スティレットはシオンたちに向けて必死に叫んでいた。

何とか立ち上がったシオンは轟雷や迅雷も一緒に、正面から3人を抱き締める。

「私だって分かってるの！！だけど怒りと憎しみが止まらないの！！殺せ、殺せって、私の頭の中で何度も何度も、私自身の声が聞こえるの！！」

「ああ、分かるよ、凄く理解出来るよ！！だってそれは、かつての僕もそうだったから！！アルテナとセリスを殺した帝国の連中を殺せって、僕の頭の中で殺人衝動が止まらなかったんだ！！」

「シオンさん・・・違う、貴方は私のパパ・・・違う！！貴方はパパじゃない！！シオンさん！！」

「君のその苦しきは、結局は君自身が乗り越えなければならぬ壁なんだ！！だけど君1人だけに背負わせるつもりは無いよ！！これからは僕たち4人が、君の事を支えるから！！」

3人の身体を離れたシオンはビームサーベルを構え、狙いを胸元のクリスタルに定めた。

そんな中でもスティレットの内に秘めた、洗脳維持装置によって目覚めさせられた、グランザム帝国軍に対しての殺人衝動が、殺せ、殺せとスティレットに何度も何度も襲い掛かる。

それでもスティレットは耐えた。必死になって耐え続けた。

そんなスティレットを支える為に、轟雷と迅雷が側面から抱き締め・・・そして立ち上がったアーキテクトが背後から、3人を力強く抱き締める。

スティレットを、轟雷を、迅雷を・・・自分の大切な部下たちを・・・いや、掛け替えのない妹たちを安心させる為に。

「5年前のあの時とは違う！！今度こそ僕は君を救ってみせる！！」

「シオンさああああああああああああああん！！」

「ステラああああああああああああああああつ！！」

一瞬の閃光が走ったと思った瞬間、シオンが放ったビームサーベルによる一撃が・・・スティレットたちの身体を一切傷つける事無く、胸元のクリスタルだけを見事に粉々にしたのだった。

6. 5年前の真実

今日はスティレットの12歳の誕生日。それを祝う為の誕生日パーティーが、満月と無数の星々の光に優しく包み込まれながら、スティレットの自宅でささやかに行われていた。

とても恥ずかしそうな笑顔を見せるスティレットを、ステインとカレットが・・・そして親友のアスナとアスカが満面の笑顔で見つめている。

スティレットの為に用意されたバースデーケーキのロウソクに、ステインがマッチで火を付ける。

全部で12本立てられたロウソクの炎に、スティレットがふうっ、と盛大に息を吹きかけ・・・点火したばかりのロウソクの炎が、あっという間に消え去ってしまった。

『『ステラちゃん、12歳の誕生日、おめでとう~~~~~！！』』

『ありがと～！！アスナちゃん、アスカちゃん！！』

『ほらステラ、これは僕からの誕生日プレゼントだよ。』

ステインがスティレットに手渡したのは、綺麗にラッピングされた大きな箱だった。

その大きさ故に、一体何が入っているのかと、スティレットの期待が大きく膨らむ。

『うわあ、何だろう、ねえねえパパ、開けてもいい！？』

『ああ、勿論だとも。』

『・・・うわあ！！』

箱の中に入っていたのは、とても大きな熊のぬいぐるみだった。

とても嬉しそうに、スティレットは熊のぬいぐるみをぎゅっと抱き締める。

『あら、良かったわねステラちゃん！！』

『うん！！パパもママも大好き！！』

『そうかそうか、気に入って貰えて僕も嬉しいよ。』

それから5人でとても楽しくパーティーを楽しんでいたのだが、食事を終えたスティレットとアスナとアスカが、3人で楽しそうにトランプを遊んでる最中・・・食後のコーヒーを飲みながら、ステインがとても心配そうな表情でカレットに語り掛けてきたのだった。

一人娘の誕生日という、とても大切なお祝いの時に、こんな事を妻に言うのも気が引けるのだが・・・それでもステインは不安になって仕方が無いのだ。

『・・・なあ、カレット・・・最近帝国軍がさ、この村の近くで新兵器の製造を秘密裏に行ってるって噂を聞いたんだけど・・・あれ本当なのかな・・・？』

『ステイン君も聞いたの？私も今日の朝、新聞配達の人から聞かされたんだけど・・・あくまでも噂話よね？』

『だけどルクセリオ公国騎士団も、この村の近くに来てるっていう話じゃないか。』

『まさか、幾らここが帝国領だからって、こんな辺境の村を襲ったりなんかしないでしょう。』

両親の不安など知る由もなく、スティレットが革命~~~~！！とか楽しそうに叫びながら、カードをテーブルの上に叩き付けた。

それをアスナが革命返し~~~~！！とか楽しそうに叫びながら、カードをテーブルに叩き付けた途端、スティレットが目をうるうるさせながら悔しそうにジタバタ暴れ出す。

そんなスティレット、そしてスティレットと仲良くしてくれるアスカとアスナたちの仲睦まじい光景を、ステインとカレットは穏やかな笑顔で見つめている。

そうだ、戦争とは無縁の、こんな戦略価値など何も無い辺境の村が、戦火に巻き込まれる事などあるはずがない・・・ステインもカレットも心の中で必死にそう言い聞かせていた。

『私、ちょっとトイレ行ってくるね～。』

『うん、行ってらっしゃいステラちゃん。』

『いてら～。』

スティレットがとても幸せそうな笑顔でアスナとアスカに手を振り、トイレの中に入ったのだが。不意にアスナが窓から外の景色を見つめた途端・・・満月の夜に照らされた夜空の中で、一筋の閃光が走ったのを見かけた。

『ねえねえステインさん、カレットさん。今なんか空が光ったんだけど、あれ何なのかなあ？』

『え？どうしたのアスナちゃん。空が光ったって・・・』

カレットが気になって窓を開けた瞬間。

次の瞬間、凄まじい爆音と共に、村全体が炎に包まれたのだった。

『一体何がどうなっているのだ！？何故突然ゼピック村にヴンダーガストが放たれたのだ！？』

『た、大尉！！ヴンダーガスト制御不能！！こちらの操作を一切受け付けません！！』

『何だと！？非常停止システム起動！！何とかしてメインエンジンを停止させろ！！』

『駄目です！！第二射が勝手に・・・うわあああああああああああああ！！』

『ふうっ、すっきりした。ねえねえパパ、ママ。今なんか凄い音がしたんだけど・・・。』

用を足したスティレットが、トイレから出て目撃した光景・・・それは・・・。

『・・・え・・・？』

黒焦げになって最早原型を留めていないアスカとアスナ・・・そしてとても苦しそうに呻き声を上げている、ステインとカレットの無残な姿だった。

一体何が起こったのか・・・スティレットはしばらくの間、全く理解出来ずにいたのだが。

『・・・あ・・・あああ・・・あああああああああ！！』

何が起きたのかを理解した途端、スティレットは絶望の叫び声を上げたのだった。

『嫌あああああああああ！！パパあああああああ！！ママあああああああああ！！』

『ス・・・ステラちゃん・・・良かった・・・貴方だけでも・・・無事で・・・』

絶叫するスティレットだったが、そこへ銃を手にしたグランザム帝国軍の兵士たちが慌てて駆けつけてきた。

帝国軍の人たちが助けに来てくれた・・・！！スティレットはそう信じていたのだが。

『あの、兵隊さん！！パパとママが！！アスカちゃんとアスナちゃんが・・・っ！？』

次の瞬間、グランザム帝国軍の兵士たちが一斉にマシンガンを掃射し、苦しそうに呻き声を上げ

るステインとカレットを情け容赦なく射殺してしまった。

一体何が起こったのか理解出来ず、目の前の光景が信じられず、スティレットは啞然とした表情で茫然自失としてしまっている。

自分たちを助けに来てくれたと…そう信じていたグランザム帝国軍の兵士たちによって、ステインとカレットが惨殺されてしまったのだ。スティレットが啞然としてしまうのも無理も無いだろう。

『よし、この家で最後だな…しかしヴンダーガストの暴走を隠蔽する為に、村人を全員殺せとは…皇帝陛下も何て無茶な事を…！！』

『少尉殿！！ここにまだ生き残りの少女がいます！！』

『何だと！？』

『ほ、本当にこんな子供まで殺すんですか！？少尉殿！？』

『仕方が無いだろう！？これは皇帝陛下からの直々の命令だぞ！？逆らえば我々が抗命罪に問われる事になる！！』

『わ、分かりました…！！』

グランザム帝国軍の兵士が戸惑いながらも、マシンガンの照準をスティレットに向けた。どうして…どうしてこんな事に…！？絶望の表情のスティレットが絶叫した、その時だ。

『何をやっているんだ！？アンタたちはああああああああああああっ！！』

立て続けに銃声が響いたと思った瞬間、どうっ…と大きな音を立てて、スティレットを殺そうとしたグランザム帝国軍の兵士たちが力無く崩れ落ちた。

啞然としたスティレットの下に駆けつけたのは、ルクセリオ公国騎士団の軍服を着た青年だった。とても真剣な表情で、青年はスティレットの前にしゃがみ込む。

『くそっ、結局助けられたのはこの子だけか…！！帝国軍め、なんて残酷な事を！！』

『あ…あああ…お兄ちゃん…誰…！？』

『ああ、安心してくれ、僕は君を殺すつもりはないよ。この村の人たちを助けに来たんだ。と言っても、結局助けられたのは君1人だけだったけど…。』

『助けに来た…！？ルクセリオ公国の人なのに…！？』

『うん、そうだよ。思い切り命令違反だけどね。あはは…。』

青年にお姫様抱っこされて外に出たスティレットだったが、既に村全体が炎に包まれてしまっていた。

そして村のあちこちで、グランザム帝国軍の兵士たちが殺したと思われる村人たちの死体が…そして青年が殺したと思われるグランザム帝国軍の兵士たちの死体までもが転がっている。

あまりの凄惨な光景に、スティレットの目に大粒の涙が浮かんで止まらなかった。

『取り敢えずこの子を助け出したのはいいけど…これからどうした物か…！！』

グランザム帝国軍の新兵器が突然ゼピック村に放たれたのは、恐らく何らかの原因で新兵器が暴走し、制御不能になったからなのだろう。でなければグランザム帝国軍が自国の領地の村を突然焼き払うような真似など、するはずが無い。

そしてグランザム帝国軍の兵士たちが村人たちを皆殺しにしたのは、その暴走の事実を世間に知られないように隠蔽する為なのだろう。青年は鋭い洞察力でそれを瞬時に判断していた。

ならばスティレットをグランザム帝国の領地内の町や村で保護させるのは、あまりにもリスクが大き

過ぎる。証拠隠滅の為にグランザム帝国軍に消される危険が高いからだ。

かといってスティレットをルクセリオ公国の児童保護施設に連れていくのも無理がある。何しろスティレットは帝国の人間なのだ。難色を示す施設ばかりだろうし、下手をすると帝国出身のスティレットが虐待される事にもなりかねない。

ならば残された手段は、スティレットをコーネリア共和国に亡命させる事しかない。コーネリア共和国は中立国だから、正式な亡命手続きさえ済ませれば、スティレットの事も快く受け入れてくれるはずだ。

青年は自分が乗ってきた車の助手席にスティレットを乗せると、慌てて運転席のドアを開けて車に乗り込んだ。

『そう言えばまだ名乗ってなかったね。僕はシオン・アルザード。君は？』

『私は…スティレット・リーズヴェルト。』

『スティレットか。呼びにくいからステラでいいかな？』

『うん。皆にはそう呼ばせてるから。』

『そうか。』

シオンがシートベルトを締めようとした、その時だ。

突然運転席のドアが開け放たれたと思った瞬間、シオンの身体が突然宙を舞った。

受け身を取り損ねたシオンは身体を派手に地面に叩き付けられ、とても苦しそうでうずくまる。

『シオンさん！？』

『アルザード上等兵！！貴様、何をやっているかあっ！！』

『ぐっ…ハーケン大尉…！！』

何とか立ち上がったシオンだったが、そんなシオンにハーケンと呼ばれた中年の男性が、情け容赦なく鉄拳制裁を加えた。

またしても地面に身体を叩き付けられたシオンが、激痛で呻き声を上げる。

『がはあっ！！』

『貴様にはゼピック村の者たちを見捨てると命令しただろうが！！何故命令を無視してこの娘を助けたのだあっ！？』

『な…何故です…！？彼女は帝国の人間とはいえ、ただの民間人の少女…っ！？』

『民間人だろうと憎き帝国の人間だ！！助ける価値など微塵も無いだろうがあっ！！』

頭に血を昇らせながら、ハーケンはシオンに殴る、蹴るの暴行を加え続ける。

そんなシオンの凄惨な光景を、周囲のルクセリオ公国騎士団の兵士たちは、ただ黙って見ている事しか出来なかった。

無理も無いだろう。軍人にとって上官からの命令は絶対だ。しかもシオンは命令違反を犯してまでスティレットを助けたのだ。

そのシオンを助けるという事は、上官であるハーケンに逆らう事を意味する…それによって抗命罪に問われる事にもなりかねないのだ。誰もシオンを助けなくて当然だと言えるだろう。

だがそんな事を、まだ幼いスティレットが理解しているはずもなく…スティレットは泣きながら必死でシオンを庇うように、ハーケンの前に立ちはだかったのだった。

『や…やめろステラ…！！』

『シオンさんをこれ以上虐めないで！！シオンさんは私を助けてくれたのに、何で虐められないといけないの！？』

『フン、薄汚い帝国の小娘が。まあいいだろう。アルザード上等兵が命を懸けて貴様を助けたのだ。それに免じて貴様を近くのマルス村で保護させてやる。』

ハーケン の命令を受けたルクセリオ公国騎士団の兵士の1人が、無理矢理スティレットを車の助手席へと連れていき、先程までシオンが乗っていた車の運転席に乗り込んだ。

クラッチとブレーキを踏みながら車のエンジンを起動し、ギアを1速に入れる。

『駄目だハーケン大尉・・・！！彼女を帝国に連れていったら・・・彼女は・・・っ！！』

『貴様あ、任官したばかりの新兵の分際で、大尉であるこの俺様に指図するつもりかあっ！？』

『ぐはっ！！ステラあっ！！』

『士官学校をトップの成績で卒業し、飛び級で上等兵に任官したからといって、いい気になりおってからに！！』

ハーケンに何度も殴られながらも、シオンは車の助手席から自分を見つめるスティレットに必死に呼びかけた。

このままスティレットがマルス村に連れて行かれれば、通報を受けた帝国軍によって処刑される可能性が高い。だがそれでも、そうならない可能性だって決してゼロではないのだ。

今のシオンでは、もうスティレットを助けられない。ならば今のシオンに出来る事は、スティレットに呼びかける事・・・それだけだ。

『ステラ！！この先、例え何があったとしても、生きる希望だけは絶対に失っては駄目だ！！』

『シオンさん！！シオンさあんっ！！』

『君の両親は死んだ！！だけど君はこうして生き残ったんだ！！だから君は死んでしまった両親の分まで、精一杯強く生きて幸せになるんだぞ！！いいな！？』

『シオンさああああああああああああああああああんっ！！』

スティレットを乗せた車が、マルス村に向けて走り去っていく。

その様子を悲しみの表情で見つめ、絶叫するシオン。

だが頭に血を昇らせたハーケンが怒りの形相で、シオンの後頭部を銃で思い切り殴りつけた。

気を失ってしまったシオンを、ハーケンが汚物を見るような目つきで睨み付けていたのだった。

その後、ハーケン隊は気を失ったシオンを車でビスマルクまで護送していたのだが、その時に帝国軍の残存部隊と交戦状態になり、それが原因でシオンを護送していた車が派手に横転する事故を起こしてしまう。

そしてただでさえ後頭部を殴られて危険な状態だったシオンは、さらに頭を叩き付けられ・・・その時の衝撃で当時の記憶を失ってしまったのである。

病院の一室で目を覚ましたシオンだったのだが、あの時の事件の事も、スティレットの事も、何も覚えていなかった。

同時にシオンに対して命にも係わりかねない程の不当な暴行を働いた事と、さらにこれまでの部下に対しての素行の悪さ、軍人としての態度の悪さ、国民からの悪評も問題となり、ハーケンは大尉階級を剥奪されて解雇処分を受けた。

また帝国領のマルス村で保護されたスティレットだったのだが、シオンの懸念通り村人からの通報を受けたグランザム帝国軍に連れて行かれ、ヴィクターによってあの事件の記憶を消される事になる。

そしてヴィクターの政略により、『ゼピック村でルクセリオ公国騎士団の襲撃を受けながらも、ただ1人生き残った奇跡の少女』として、ルクセリオ公国への怒りと憎しみの象徴として、本人の意思など関係無しに盛大に祀り上げられる事になるのである。

かくしてシオンとステイレットは5年後に、互いの事を何も覚えていないまま、皮肉にも敵同士として戦場で再会する事になってしまう。

戦場で何度も死闘を繰り広げたシオンとステイレット。だが激しい戦いの中で悲壮な運命に翻弄されながらも、2人は遂に失われた記憶を取り戻し…本当の意味での再会を果たした。

5年の時を経て、シオンとステイレットは…やっと巡り逢う事が出来たのだ。

7. やっと、逢えた…！！

最高司令官である皇帝ヴィクターが死亡した事で、グランザム帝国軍は指揮系統が乱れて大混乱状態に陥ってしまい…完全に戦意を無くしてしまった帝国軍の兵士たちは一斉に城下町へと撤退していったのだった。

それによって今回の戦闘は、ルクセリオ公国騎士団の勝利という結果となる。

皇帝が不在となったグランザム帝国に対しての降伏勧告、和平交渉などの政治的な問題は残されているが、10年も続いたこの戦争も取り敢えずは一段落を見せる事だろう。

先程まであちこちで響いていた銃声や爆音も、今ではもうどこからも聞こえない。美しい夕焼けの光と静寂が、シオンたちを優しく温かく包み込んでいた。

「…5年ぶりですね。シオンさん…やっと、逢えた…！！」

目に涙を浮かべながら、とても嬉しそうな満面の笑顔で、ステイレットはシオンの身体をぎゅっと力強く抱き締めていた。

もう二度と離さない…もう二度と離れたくない…ずっとシオンさんと一緒にいたい…そんな強い想いをシオンに示すかのように、ぎゅっと…ぎゅっと。

パワードスーツ越しでも分かる。シオンの身体はとても温かい。そして軍人としては細身で、ちょっと頼りないけど…それでもとても力強く心強い。

この身体でシオンは5年前、自分の事を命懸けで助けてくれたのだ。それを思うとステイレットは、とても感慨深い物を感じていた。

シオンが洗脳維持装置を破壊した事で、ステイレットは完全に呪縛から解放され、すっかり元通りの心優しい女の子に戻っていた。

そしてステイレットは理解した。何故自分がシオンの事を忘れながらも、戦いの中でシオンに対しての懐かしさと愛おしさが日に日に強くなっていったのかを。

ステイレットは5年前のあの日からずっと、シオンの事を大切に想っていたのだ。

記憶を失いながらも心の奥底で、潜在意識の中で全く自覚しないまま、ずっと…ずっと。

「5年か…本当に長いようであつという間だったよ。だけどハーケン大尉のせいとはいえ、君の事を5年間も忘れていたなんてな。」

シオンもまた、ステイレットの身体をぎゅっと抱き締める。

この5年もの間にステイレットは、随分と可憐な少女へと成長した物だ。

自分が5年前に命令違反を犯してまで、命を懸けて守り抜いた…いや、確かに命は救ったものの、本当の意味で守る事が出来なかった少女。

だけどそのスティレットが、今こうしてここにいるのだ。

「それは私だってそうですよ。だって皇帝陛下に記憶を消されていたんですから。だけど皮肉な物ですよ。洗脳がきっかけになって、私はあの時の記憶を全て思い出したんですから。」

「どうしてなんだろうな…どうして僕たちは、敵同士として再会してしまったんだろうな。しかも互いの事を何も覚えていないまま…どうして殺し合う羽目になってしまったんだろうな。」

これが運命のいたずらなのだとしたら、これ程酷過ぎるいたずらは無いだろう。

自分が5年前に命を懸けて守り抜いた少女を、シオンは危うく殺してしまう羽目になってしまったのだから。

そんなシオンの心情を察したのか、スティレットはシオンの頬を両手で優しく包み込んだ。

そして潤んだ瞳で、シオンの顔をじっ…と見つめる。

「今のシオンさんは、もう私の敵じゃない…そうでしょう？私の事を守ってくれるんでしょう？」

「当たり前だよ。君と戦うなんて僕はもう二度と御免だ。いや、君だけじゃない。アキトも轟雷も迅雷も。君が大切に想っている彼女たちとは、僕はもう敵同士じゃないんだ。」

そもそもアーキテクトたちが皇帝ヴィクターに謀反を宣言し、グランザム帝国軍から脱退した以上、もうシオンがアーキテクトたちと戦う理由など何も無いのだが。

「…ねえ、シオンさん。」

スティレットの顔が、ゆっくりとシオンの顔に近付いていく。

「私、この戦いで死ぬかもしれないから…後悔だけはしたくないから…今ここではっきりとっておきますね。」

「あ、あの、ちょっと、ステ…。」

「私、シオンさんの事が好きです。」

ちゅっ。

スティレットはシオンと唇を重ねた。

いきなりの事に驚きを隠せないシオン。うおおおおおとか叫ぶ轟雷と迅雷。苦笑いしながらその様子を温かく見守るアーキテクト。

とても優しくて柔らかくて温かい、スティレットの唇の感触が、激しい戦いで疲れ切ったシオンの心と身体を癒していくのだが。

「…待った！！ちょっとタンマ！！ステラ！！」

だが突然シオンが慌てふためいて、スティレットの身体を無理矢理離したのだった。

自分のキスを拒絶された事で、スティレットはとても悲しそうな表情になる。

身体を震わせながら、スティレットは涙目でシオンを見つめた。

「どうして？私じゃ駄目なんですか？それともシオンさんは、やっぱりアルテナさんの事が忘れられないんですか？」

「違う、そうじゃないんだステラ。僕はアルテナの事を忘れるつもりは無いし、過去の女性にする

なっていたのだ。

アルテナの事を忘れるつもりは無い。過去の女性にするつもりもない。
だが今のシオンが心の底から好きなのは・・・目の前にいるステイレットなのだ。

「・・・好きだよ。ステラ。」

ステイレットを優しく抱き寄せ、静かに唇を重ねたシオンに、轟雷と迅雷が盛大な拍手と歓声を送ったのだった。